九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析 ： マレーシアの日本語教育への提言

Ku Mohd Nabil
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494663

出版情報：比較社会文化研究. 22, pp.35-45, 2007-09-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第22号（2007）35～45
Social and Cultural Studies
No. 22（2007), pp. 35～45

日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析

～マレーシアの日本語教育への提言～

クモハマド　ナビル

1．はじめに

マレー語と日本語との対照研究は、日本語を教える際にこれまで重要な資料を提供し、役立ってきたが、先行研究の多くは、音声、形態、統語論のレベルに限られ、意味、語用論（プラグマティックス）のレベルでの対照研究はほとんどなかった。現在、日本語を第二言語として学ぶ人のための日本語教育において、コミュニケーション能力育成はなくてはならない課題である。コミュニケーション能力とその育成についての認識は、これらの教育に携わる人々の間にかなり大きな隔たりがあるように思われる。

謝罪表現については、言語学・心理学・文化人類学・コミュニケーション論などの分野から分析が試みられているが、言語教育の分野、特に日本語教育においてはごくわずかである。また、謝罪表現を対象にした語用論研究としては、異文化間データというより主に中間言語の言語伝達能力によるデータが多いようである。[1] 更に、謝罪表現のレパートリーおよび用法の異言語間比較として、日・タイ、日・中、日・英（日・米）、日・韓の定型表現を扱った研究があるが、日・マ[2]を扱った研究はほとんどない。

謝罪表現は、円滑なコミュニケーションの基本に位置する言語表現である。その意味で、外国人に対する日本語教育の中でも、重要視されるべき項目であろう。しかし、現実的に現場での日本語教育の事情を分析してみると、堀江・インカピロム・プリヤー（1990：27）は、タイ人に日本語を教える教師たちが、日本語の謝ることばの種類とその使われ方の範疇とについて十分に認識していないため、教師でもそのことについて教えることはあまりないということを指摘している。あるいは、日本語教師は、タイ人にとって日本語の謝ることばがタイ語より複雑でわかりにくいということを認識していないのではないかと主張している。

従って、本研究では、多様な状況における日本語母語話者の言語使用の実態を明らかすることにより、次の二点を可能にすることを指摘する。①日本語指導者に対しては、情報上のインプットと言語上のインプットとなること。②日本語学習者に対しては、日本人の「謝罪」を理解すること、および場面・状況や相手により異なる 、適切な謝罪表現・謝罪のストラテジーに関する指導を可能にすること。本調査の結果は、マレーシア人日本語学習者に、日本人を相手にコミュニケーションをしようとするとき、どのようにすれば、適切で失礼にならずに謝罪することができるかを教えるのに役立つと思われる。

この研究は、異文化間のミス・コミュニケーションの解消とマレーシアでのコミュニケーション教育を目指している日本語教育の研究に貢献すると考える。

2．研究方法

本稿では、従来分析した「謝罪」という発話行為の「日マ」対照研究による再考であり、主に4つの研究からまとめたものである。それは、1）謝罪意識、2）謝罪ストラテジー、3）謝罪表現　4）ポライトネス・ストラテジーというものである。更に、社会言語学的な考え方をもとに、現実的にどうやってマレーシアの日本語教育現場に取り入れるのかを試みたものである。

3．結　果

分析の結果、「日マ」の謝罪の謝罪意識、謝罪ストラテジー、謝罪表現、ポライトネス・ストラテジー、謝罪を強める副詞表現、謝罪を強める文末表現、謝罪の選択基準、謝罪の機能、謝罪の照準においては、「日マ」の謝罪行動が共通の適切性に従いながらも、同時に異なる志向性も持っていることが観察された。以上のような「日マ」の謝罪行動における差違は、文化規範・慣習・信仰との関連でみることができると言えよう。更に、分析した結果に現れた傾向に基づいて、社会的相互作用に焦点をあてて考察を行っ

[1] Much of the cross-cultural research into the speech act of apologizing has focused on the phenomenon on non-native communicative competence　and less on cross-cultural data for their own sake.(M.Suszczynska 1999：1853)

[2] 「日本・日本人」を「日」、「マレーシア・マレーシア人」を「マ」、と略記した。

た。この観点から「謝罪」を捉えると、本研究で設定された「人間関係の修復作業」と「尊敬行動」という機能があることが分かった。調査結果の主なものをまとめると次のようになる。

3．1　謝罪意識

3．1．1　謝罪意識項目Ⅰ「謝るべきだと感じる度合」と謝罪意識項目Ⅱ「すまないことをしたと感じる度合」との差異については、「日」では、謝罪意識項目Ⅰ「謝るべきだと感じる度合」が、謝罪意識項目Ⅱ「すまないことをしたと感じる度合」よりも高かった場面もあるが、その逆となった場面もある。他方、「マ」では謝罪意識項目Ⅰ「謝るべきだと感じる度合」が、謝罪意識項目Ⅱ「すまないことをしたと感じる度合」より高い数値の出た場面はあるものの、謝罪意識項目Ⅱ「すまないことをしたと感じる度合」が謝罪意識項目Ⅰ「謝るべきだと感じる度合」よりも高くなった場面がなかった。ここからは、両文化における謝罪の秩序に差異が存在することがわかる。

3．1．2　場面「⑪　金銭貸借の断り」、「③　失言：悪口」などで「マ」は「日」より謝罪意識項目Ⅰ「謝るべきだと感じる度合」と謝罪意識項目Ⅱ「すまないことをしたと感じる度合」でも高い値を表した。この現象は、人情の構成の仕方による「義理」と「義務」などの違いがその原因だと考えられる。

3．2　謝罪ストラテジー

3．2．1　「日」においては、直接で明確である謝罪表出は「マ」に比べ多様であり、更にその言葉を繰り返し使う点が特徴である。一方、「マ」においては、「minta maaf」という直接的な謝罪は繰り返し述べることは殆どないが「日」に比較して使用頻度が高い。

3．2．2　「日」においては不快状況に至った原因などの説明はあまりしないので、「日」の謝罪は短い。他方「マ」においては不快状況に至った原因などの合理性の説明がなされ、現状修復の申し出による発話ならびに「わざとじゃない」という言葉が付加されるため、謝罪が長くなる傾向がある。

3．2．3　【呼びかけ】においては、「日マ」で全体的な使用傾向に顕著な相違がみられることがわかる。

3．2．4　ストラテジーの順序という視点から見ると、「日」の謝罪は、明確な謝罪表現の後に【相手を配慮する】か【弁償する】という【不快状況の修復】の発話が行われるが、「マ」においては【呼びかけ】か【わざとじゃない】という発話が行われる。

3．3　謝罪表現

3．3．1　対照的に、豊かで丁寧な謝罪表現を持っている日本語と少数謝罪表現を持っているマレー語の相違が明らかになった。

3．3．2　両言語では謝罪はあらゆる場面において1）後悔の表出2）謝罪の表出 3)許しを乞う、の 3 つの明確な表現で行われる。「日」では、1）と2)が多く、他方、「マ」では3)が多く使用される。

3．3．3　日本語の方では謝罪の気持ちを強める副詞表現と文末表現を多用する傾向が観察されたが、日本語の「ね」という文末表現が謝罪表現に付くと丁寧な謝罪表現になる。他方、マレー語では「kan」、「lah」という文末表現が謝罪表現に付くと、謝罪の申し出という意味から許しを乞うという意味に変わる。

3．3．4　非言語表現においては、「日」にはお辞儀、「マ」には握手という代表的なものがあげられる。

3．4　ポライトネス・ストラテジー

3．4．1　日本語の場合、日本人は相手を「ウチ・ソト」の区別をし，適切なポライトネス・ストラテジーを使用し、日本語の謝罪マーカーである「すみません」、「申し訳ありません」などの定型表現だけでも十分ポライトネス・ストラテジーが入っており、日本語の謝罪エラボレイション部分のポライトネス・ストラテジーは相手による‘デス’と‘マス’という文末表現の区別が明確であった。

3．4．2　一方、マレー語の謝罪マーカーは“minta maaf”しかないので、成因分析の段階ではポライトネス・ストラテジーの存在は判断できない。また、敬語体系を有しないマレー語では発話する時に｛呼びかけ｝によって相手を「ウチ・ソト」の区別をせず、インナー・ウチの関係と扱っている．｛呼びかけ｝の種類は、｛‘bang’ ‘kawan’ ‘dik’ ‘saudara’ ‘kak’ ‘makcik’ ‘pakcik’｝という家族的な呼びかけと｛‘cikgu’｝という立場を尊敬する呼びかけである。この現象はマレー語の謝罪表現によるポライトネス・ストラテジーと見なす。

3．4　謝罪を強める副詞表現

3．4．1　マレー語では、謝罪表現副詞表現を使うか否かは「不快状況」によって決められる。例えば、不快状況が小さい場合には、「minta maaf」を、不快状況が大きい場合には「minta maaf banyak-banyak」を使って謝罪する。他に「benar-benar」、「sungguh-sungguh」があるが、あまり使われていない。一方、日本語の謝罪の気持ちを強める副詞表現のうち、

「本当に」の使用頻度が高い。他に「たいへん」、「どうも」、「ほんま」、「まじ」がある。

3．5　謝罪を強める文末表現

3．5．1　日本語の謝罪の気持ちを強める文末表現はマレー語に比べると少ないが、「ね」が圧倒的に多用されていることがわかる。他方、マレー語では「kan」、「lah」、「ya/ye」という文末表現がある。

3．6　謝罪行動の選択基準

3．6．1　状況優先の原則を用いる選択基準である「マ」の謝罪行動と、相手優先の原則を用いる選択基準である「日」という規範があることを示唆していると思われる。

3．7　謝罪の機能

3．7．1　総体的に本研究において、「謝罪」は「修復作業」（remedial work）と「尊敬」（respect）のような儀礼的機能として用いられるが、「日」文化において両方とも頻繁に使用されており「マ」文化においては片方の「関係修復作業」という機能しか言語構造に含まれていないと考えられる。

3．8　謝罪の照準

3．8．1　「日」の謝罪照準は相手の気持ちの回復にあるが、「マ」の謝罪照準は相手と神様との関係修復にある。

4．日本語教育への提言

4．1　日本語教育における謝罪の扱い

人間を中心にすえた日本語教育は、日本語で「リアル・コミュニケーション」を目指す。リアル・コミュニケーション[3]とは、「今ここで」（現実の場面）自己によって真実で意味あること（メッセージ）を目標言語（日本語）で交換することである。従来の日本語教育における謝罪の扱いを見てみると、中道（1993：）は、日本語教材の多くが謝罪の専門表現を早い段階から取り上げているが、特に文法項目シラバスによる教材の場合、実際には次のような形で導入されることが多い。

(1)　ちょっとすみません。タクシーのりばは、どこですか。（基礎編２巻）

(2)　さあみなさん。お茶をどうぞ。/あっ、こりゃどうもすみません。（ヤン第２話 ）

(3)　はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいませんか。（基礎編13巻）

いずれも、謝罪の意味を持つ「すみません」を使ったものではあるが、それぞれ(1)注意をひく(2)感謝(3)依頼のやわらげ機能を持つものが提示されており、何かを「謝る」用法でない。さらに、謝罪そのものの場面を取り上げている場合も、謝罪を構成する要因や談話の流れを分析して学習するよりも、むしろ「ことば」そのものを「重要表現」として提示することに重点があるように見受けられる。

現在のマレーシアの中高学校の日本語のシラバスは「すみません」「ごめんなさい」「しつれいします」が「挨拶など」の欄では紹介されているが、各課に見てみると直接謝罪の意味が入っている専門表現としては扱われていない。例えば、

(1)　アズミ：すみません、いま　なんじ　ですか。（にほんごこんにちは[4]：第四課）

(2)　とおこ：すみません、このノートは　いくらですか。（にほんごこんにちは：第七課）

上記の例から、マレーシアをはじめ、他の国での日本語においては、部分的な謝罪の用法しか扱われていないことが分かった。

4．2　マレーシアの日本語教師における謝罪表現についての知識の実態

筆者が2006年４月16日に、2006年度日本語教師セミナーに出席したレシデンシャル・スクールの日本語の教師55名を対象にして、実施したマレーシア人日本語教師における日本語の謝罪表現の調査をまとめると次のとおりである。

ａ）日本語の「謝罪表現」に対する印象

使い分けることが難しい	48.3%
種類が多い	35%
複雑である	11.6%
その他	5%

その他の回答は、日本語の謝罪表現がマレー語の謝罪表現に相当できないため、説明することが難しいという意見だった。

[3]　縫部良徳(1994：183)

[4]　マレーシアの教育省によって出版された日本語の教科書

b）日本語の「謝罪表現」の教えた経験

謝罪表現	教えた経験
すみません	100%
ごめんなさい	100%
申し訳ありません	10%
ごめん	10%
失礼	95%
悪い	20%
すまない	0

c）日本語の「謝罪表現」に対する理解度の自己評価

	5	4	3	2	1
すみません	62%	18%	20%	0%	0%
ごめんなさい	45%	20%	35%	0%	0%
申し訳ありません	45%	20%	20%	15%	0%
ごめん	35%	35%	30%	0%	0%
失礼	40%	40%	20%	0%	0%
悪い	25%	40%	25%	10%	0%
すまない	5%	35%	50%	5%	5%

d）日本語の「謝罪表現」を場面シラバスの内容に対する意見についた、全員が賛成するという意見を出した。

4．3　学習際の配慮する問題点

謝罪表現やその選択基準は「日マ」両言語や文化間によって幾分異なるルールに従ってなされるものであり、日本語と違って、マレー語の謝罪表現は少なく、上下関係で語形式を用いないことがわかった。たとえば、日本人同士と同じ場面で使ったとしても、日本人でない相手は、日本人と同じようにそのことばを理解するとはかぎらない。さらに、マレー語の　[maaf]　も、日本人の言う「すみません」、「ごめんなさい」「申し訳ありません」とは一致しないことが明白である。

山口(2002：156)が報告しているように、「ストラテジーや表現の選択に影響する「親疎」や「上下」と言った要因の優先順位が母国と対象言語で異なる場合、学習歴1～2年次に母語の干渉が強く現れ、また対象言語に特有の言語表現が同義でかつ多様な表現形式を持った場合、その使い分けの認識には時間を要する。また、上級レベルの日本語表現には統語的な誤用が少なくなっても、語用論的には適切ではない場合があり、滞日期間が短く、実生活での日本語使用経験が浅いほど母語や母国文化の干渉を受けやすい」と主張している。しかし、謝罪とは、社会生活で重要とされるコミュニケーションの技術、すなわち「ソーシャル・スキル」の一種にほかならない。スキルである以上、それは学習によって学び、身につけることができる。このことは謝罪の上手・下手というものが、必ずしも本人の性格からくるものではなく、きちんとした考え方とトレーニングを経験しさえすれば、いくらでも変えていくことができると言う意味をしている。外国語による謝罪も、謝罪の技術を身につけてしまえば解決する。本研究で得られた結果から、いくつかの点についてマレーシア日本語教育への提言として挙げることができることを検討する。

4．4　「日マ」文化における円滑な対人間関係やコミュニケーションのための謝罪ストラテジーや謝罪表現

謝罪を発話行為として選んだのは、二つの理由がある。一つ目は、謝罪そのものがある文化に固有の価値観、規範、好みをよく表しているということである。二つ目は、発話・言語行為において、ある文化に固有の形式が言語構造に生まれやすいと考えられることである。たとえば、謝罪するという発話・言語行為は情報を伝えるという目的以上のものである。むしろ、それは、人間関係の不均衡に対する関係修復という目的や、とりわけ「友人・ウチ・親」関係では、相手との連帯感を強めるという目的を持つ。また、「ソト・疎」関係では、謝罪を話のきっかけとするといった、人間関係を確立して相手を「尊敬」するという目的をもつこともある。

また、ここで用いた場面の多くは無関係で疎遠な相手より、知っている人、いわゆる「友人」（ウチ・親）を謝罪対象として選んでいる。その理由は二つ考えられる。一つ目は、自分の働きかけが原因で相手との関係に不均衡をもたらす危険性がある場合に、親しい相手を同じクラスや同じ会社といった同じ集団に所属する「ウチ」のメンバーと考えることが可能かどうかが、表現やストラテジーのスタイルを決定する重要な要因になるものと考えられるからである。二つ目は、無関係で疎遠な人間間の環境より、親しい関係にある人間関係が、その関係が崩れる危険性が高いと考えられるからである。

更に、場面による事柄の選択には、日常による友達同士の人間関係によく起こる、悪口や金銭貸借などといった不快な状況を、身体的接触などの公衆的なエチケット違反より多く設定した。

「日」の場合、「同等の親しい相手」を発話相手とした場面[5](①、③、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑯)の８場面では、「普通体」と「いろいろな謝罪表現」の使用頻度が明らかに高い。更に、場面「⑨物品の損害」である兄「ウチ親」にも同様である。更に、実際の日本語によるコミュニケーショ

[5]　場面設定は本稿の(5社会言語学的観点からみた練習活動)参照

ン場面では、「すみません」、「ごめんなさい」、「申し訳ありません」のほかに「すまない」、「失礼」、「悪い」などが使用されるし、豊かな謝罪表現が存在していることが分かった。

表1「普通体」と「謝罪表現」の例

（データは従来の調査より）

場　　面	発　　話
「①遅刻」	「ごめん、道が混んでてさ」
「③失言：悪口」	「ごめん、あまり気にせんで」
「⑨物品の損害」	「本当ワリー、弁償するケー」
「⑩失言：給料」	「ごめんね、いきなり変なこと聞いちゃって」 「ゴメンネ、イヤなこと聞いたね、失礼やったね」
「⑪金銭貸借の断り」	「あ、すいません、俺今貸せんけん」
「⑫不作法：唾」	「ごめん、とんだ」
「⑬助けてもらう」	「迷惑をかけてすまん、ありがとう」
「⑭間違い」	「ごめん、俺が間違ってたみたいね」
「⑯能力を生かさない」	「無理だわ、ごめんね」 「ごめん、俺じゃ無理みたい」

言語形式上では、「日」の回答から明らかなように、日本語はマレー語と違い、謝罪表現の種類および内容に関わらず、「同親」の相手に対しては常にすべてのグループが「普通体」を使用している。これらの場面のうち、「③悪口の謝罪」と「⑪金銭貸借の断り」という心的抵抗が高い場面でも「同親」に対しては「普通体」の使用頻度が100%である。「普通体」の使用は、とりわけ「悪口」の場面で、相手に心理的な被害（傷つく）を与えることとなり、対応の仕方によっては相手との関係修復を不可能にする危険性を持つ発話行為である。このように相手との人間関係の均衡を崩しかねない場面でも「同親」が使用されるのは、日本語における「普通体」の使用が相手との心理距離を縮めるという機能を持っているからであり、「普通体」の使用が必ずしも、相手への配慮にかけた粗野な表現となるわけではないということがわかる。

従って、日本語では「同親」に対してはどの場面でも「普通体」が使用されるという結果は、「普通体」の使用でも十分に丁寧さに配慮した発話が可能であると言うことを示している。本研究の分析結果では、「同親」に対する「普通体」「ごめん」という謝罪表現には文末表現「ね」を使用することによって親しみ、丁寧を表そうとしていることは明らかである。筑紫（1993：81）は、 謝り言葉に「ね」が付いた場合、「ごめん」より「ごめんね」を丁寧としたが、「ごめんなさい」と「すみません」は、「ね」が付いた方が、馴れ馴れしさを感じるので、「ごめんなさいね」より「ごめんなさい」を、「すみませんね」より「すみません」を、より丁寧であると主張した。

また、一般に、日本語は上下関係で語形式を変化させる敬語を用いたり、相手との関係で文体を変えて丁寧度を高めて表現するという点が特徴的な言語だと言われている。この現象が謝罪表現の発話にも起こっている。日本語で使われる「丁寧体」は心的距離がある相手に対して礼節をある程度を示す働きを持つものである。疎遠な相手に対しては、相手との人間関係の均衡を崩す危険を最小限のものとするために「丁寧体」を使用することで相手への配慮を示そうとする。

一方、マレー語には文体の区別はなく、人称代名詞が変わるだけでも十分であるため、「同親」を発話相手とした場面（①、③、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑯）の8場面では、自分（第一人称代名詞）を示す時「普通体」の使用頻度が明らかに高い。

分析した結果では、「すみません」という直接謝罪の発話の使用頻度は非常に高く、多くの場面や相手に対して用いられ、日本人の謝罪はこの謝罪表現に特徴づけられる。近藤（2002：49）によると、「すみません」という言葉は相手の「負」を認識する言葉であり、自分が負わせた相手の「負」、すなわち傷を認識していることを伝え、相手の気持ちを癒そうと謝罪するという。彼女は「すみません」の語源からして、日本人は相手の心も自分の心も「澄む」ことを照準に謝罪する」と主張している。

また、森山（1999：80）によると、日本語の「すみません」は、本来お詫びの表現だが、お礼にも使われるという。従って、熊取谷（1992：23）によると、「日本語におけるお詫びの大きな特徴は、感謝の対象となり得る状況で用いられることであろう。この現象は、話し手にとっての「快適状況」を聞き手にとっての「不快状況」と捉える視点の移動により生じた「状況転換」の結果がもたらしたものと見ることができる。また、この場合、お詫び表現を用いる方が感謝表現を用いるよりも丁寧と考えられているから、この状況転換は丁寧行動の方略として機能していると考えられる」と主張している。

「すみません」に相応するマレー語の “minta maaf” は謝罪すると同時に感謝するという機能を持ち、「マ」の社会でも “minta maaf” をもって相手の親切に感謝することができる。「日マ」両言語に共通して、依頼は不快状況と認識されている。従って、依頼の直前に、「日」の場合「すみませんが」、「マ」の場合、“minta maaf” が使用されることが多い。これは、後続する発話行為をやわらげる丁寧行動の方略として機能している。

また、「すみません」という談話機能は、謝罪表現以外の手段によっても表現することができる。「すみません」とい

う表現はこうした社会文化的な機能を持つことによって、社会文化知識としての学習内容、談話行動に関する学習内容、また言語形式による学習内容として有効であると思われる。

分析結果から、「助ける」場面において、「日マ」とともに、「謝罪」のほかに「感謝」の意識も存在することがわかった。佐久間（1983）は利益をもらう時に使う「ありがとうございます」は「自己志向的」表現であるのに対し、「すみません」は「他者志向的」表現であると言及している。本研究では「助ける」場面「⑫：資料を送ってもらう」によく使われる「すみません」は確かに謝罪する意味が入っていて、「ありがとうございます」はまったく同じ機能ではないと実証した。「助ける」には、「日マ」ともに「謝罪」と「感謝」の意味が現れたことから、「日マ」対人の視点は「他者志向」と「自己志向」が存在していることがわかる[6]。

「日マ」のインタビュー調査を分析した結果を考察すると、「助ける：⑫資料を届けてもらった」場面で、社会的な変数を友達から先生や先輩に、あるいは同等から目上に相手を交替させた場合、「感謝」より「謝罪」と答えた被験者がほとんどであった。このことは、本研究で定義してきた謝罪表現が「尊敬」表現として機能していること、ならびに「日マ」における「謝罪」表現が日常の円滑な対人間関係構築に積極的に機能していると言える。

森山（1999）は、「そもそも、お礼とお詫びをする際には何らかの原因があるという。それは、人に何かをしてしまった場合や人に対して迷惑を掛けてしまった場合の、利害関係上の心理的不均衡である。これを調整する装置いわば危機管理としての言語行動が、お礼、お詫びである。お礼とは、聞き手からの利益の提供に伴う不均衡の修復、お詫びとは、聞き手へ損害を与えたことによる不均衡の修復であり、両者は対人関係の修復としてまとめることができる」と主張している。

「謝罪」場面では、借りていた相手の本を汚してしまったり、借りていた相手の車をぶつけてしまったという行為が、対象者となっている被験者自身の相手との人間関係の均衡を崩す要因となっている。これらの場面では、ストラテジーや表現の使用が著しく頻出する。なぜなら、これらの場面では、いずれも相手との関係のバランスを崩したことに心理負担を感じているはずであり、謝罪のストラテジーや表現の目的を成し遂げるためには、そのバランスを均衡な状況に戻し、相手に受け入れてもらえるようなストラテジーを考えなくてはならないからである。すると、これらの場面では「日」、「マ」が行った【弁償する】の選択は人間関係の均衡を取り戻して相手に受容されるための補償作用を意図して行われた可能性が高いと考えられる。

実際、「日」の被験者のインタビューでは、親しい相手には【わざとじゃない】ということをわかってほしいが、それ以外の相手には謝って弁償するしかないという回答があった。もちろん相手に与える損害の程度にもよるだろうが、比較的弁償が容易なものに対しては、親しい関係にある人ならその後の行動の方が重要であり、それ以外の人に対しては、信頼回復の機会を得るのが困難になるので【弁償する】必要があると考えるのであろう。

一方、「マ」の被験者のインタビューでは、【わざとじゃない】ということを親しくない相手以外の相手にもわかってほしいという回答があった。更に、借りていた相手の本を汚してしまったり、借りていた相手の車をぶつけてしまったという場面以外にも見られ、それは謝罪の原因となっている行為が作為的ではなかったことを伝えようとするものであると考えられる。

更に、【謝って弁償するしかない】というストラテジーは相手に許してもらうために重要な条件であるという回答があった。

本調査では、【責任承認】の場合、「日」は「マ」よりの使用頻度が低い。杉本（1995）は、日本人の「謝罪」は【責任承認】が必ずしも包含されていないと述べた。日本人の謝罪は自分の非を認めるというよりむしろ場の雰囲気を柔らかくする働きをもつ。また、熊取谷（1992：33）は、「責任の表明でないお詫びの存在は事実関係重視の言語行動よりも対人関係重視の言語行動を取る場面が、他の文化より日本文化でより多いことを示すものと考えられ、この傾向はコマーシャルの言語にも見られる」と主張している。

「日」では、「謝罪」の場面で、どの表現を使用するかは、相手の行為をどのように受け取るか、ならびに自分が相手に及ぼす迷惑度、被害の大きさをどのように受け取るかという個人の判断と相手との関係によって決定しているという傾向が見られた。他方、「マ」は不快状況や負担の程度による判断によって決定しているという傾向が見られた。このことは、以下述べるように、謝罪項目Ⅰ「謝るべきだと感じる度合」と謝罪項目Ⅱ「すまないこととしたと感じる度合」の回答傾向、謝罪ストラテジー、謝罪表現などから明らかになった。

「マ」の回答を、相手にかけた負担の大きさや、相手との親しさの程度と関連づけて分析すると、まず、相手の「負担」が大きい時、謝るべきと感じる傾向があった。この傾向は相手が目上で、家族ではない、いわゆる「ソトの関係」にある時にも相手との親しさとは無関係に謝るべきだと感じる傾向が増加する。

[6] しかし、本研究では、両文化における「他者志向」と「自己志向」のレベルの差違については触れない。日マに「他者志向」と「自己志向」はどれが謝罪意識に影響しているか、もしくはどれが強く働くかは異文化で異同が生じると思われる。

一方、「日」の回答を、同様の観点から分析すると、まず相手の「負担」の大きさだけではなく、相手との親しさの程度に応じて謝るべきだと感じる度合が変わる傾向があった。この傾向は相手が目上で、家族ではない、いわゆる「ソトの関係」にある時には相手にかけた負担の大きさとは無関係に謝るべきだと感じる傾向が増加する。

「日」は、基本的には、年齢や立場の違いを表す「上下関係」と心的距離を表す「親疎関係」という人間関係が優先的に配慮され、次に同じグループに属するか否かを表す「ウチ・ソト」が判断基準になり更に、事柄の内容の「緊急度・必要性・コスト」を配慮して、謝罪ストラテジーと表現の選択を行う。この「ウチ・ソト」は謝罪表現を決定する重要な要因である。そのため、特に同等だが疎遠な相手に対して自分の働きかけが原因で、相手との関係に、不均衡をもたらす場合には、相手を「ウチ」のメンバーとして心的距離を縮めるために、同等の親しい相手にするように謝罪表現と謝罪発話スタイルを「普通体」にすることで相手との不均衡を取り戻そうとする。

他方、「マ」は、基本的には、まず「必要性」という自分の領域と神様にかかわる事柄が重要な判断となり、次いで緊急度とコストである「事柄」の内容が配慮され、更に、互いの心的距離を表す「親疎関係」を配慮して、謝罪ストラテジーや表現の選択を行う。すなわち、話し手自身の働きかけが原因で、相手との関係が不均衡な状態になる場合には、先に自分の非を認めてから、許してもらうように努力することによって相手との均衡を取り戻そうとするものと考えられる。宗教上の理想的な謝罪とは、相手に許してもらわないと、神様に許してもらえないので、謝罪による相手を許すことは神様に許してもらう条件になる。つまり、相手との不均衡な関係は神様との不均衡な関係を意味することが最も重要な選択基準となる。次に、「ウチ・ソト」、「疎遠」は謝罪ストラテジーを決定する重要な要因であるため、特に同等だが疎遠な相手に対して自分の働きかけが原因で、相手との関係に不均衡をもたらす場合には、「ソト・遠」の相手を「ウチ・親」のメンバーとして心的距離を縮めるために、同等の親しい相手にかかわらず、謝罪表現の発話ストラテジーを【呼びかけ】によることと「人称代名詞」を変えることで相手との不均衡を取り戻そうとする。

近藤（2002：58）は、「日本人は相手に与えた「負」に焦点を当て、「謝罪」の意を伝えることで相手の気持ちに訴え、緩やかにするように努力する。照準は相手の気持ちの回復にある」と主張している。一方、「マ」は現状に立ち、相手に許しを願い、真実に基づいて説明を行うことにある。照準は、相手と神様との関係修復にあると言えるだろう。

「日マ」において、「謝罪」は人間関係修復のための方略と見ることができるが、どの状況が修復作業を要求するかは両言語・両文化間に差異があること、更に、どの修復作業の型を用いるかにおいても差異が存在することが明らかになった。謝罪ストラテジーや表現に用いられる修復作業に対人交流上の目的や社会的相互作用を成立させることが最重要であるとの視点から考えてみると、「日」は「マ」より対人交流上の目的と社会的相互作用が有効的に機能していると言える。換言すると、「関係修復作業」という機能であるとともに「尊敬」という機能である「謝罪」は、「日」文化において頻繁に使用されており、「マ」文化においては片方の「関係修復作業」という機能しか言語構造に含まれていないと考えられる。

上記に触れたように、「謝罪」は、関係修復行動において重要な行為であり、「日マ」の社会での行動期待や義務として暗黙の了解のもとに成り立っているため、対人交流上の目的と社会的相互作用という点において、異文化間での相違が予測される。外国人にとって、彼らが円滑な人間関係やコミュニケーションを行えるようにするため、対人交流上の目的と社会的相互作用を分析し、それを習得させる日本語教育が有効だと思われる。

5．社会言語学的観点からみた練習活動：社会から教室へ、教室から社会へ

本節では、もっとも目ざましい展開を見せているタスク中心の指導について、今後の日本語教育を中心に担う可能性を持つものとして検討する。

社会言語学的配慮に中心をおいたタスクの見方からすれば、タスク完成までのプロセスは以下のような二段階をふむ。まず第一段階で、学習者は、聴いたり、読んだりすることによって言語を理解する。次に第二段階で、理解したことを何らかの活動や行為によって表現する。一般的に、コミュニケーション活動と呼ばれているものは、タスクの活動としての性格を備えているものが多いことである。これは学習者間の会話にできるだけ自然度 authencity（実際の日本語話者の話の持つ自然さ）を持たせる意味で重要な要素である。一般的学習者は、このようなちょっとした日本語らしい日本語を習うのをとても好む傾向がある。更に、マレーシアの日本語学習者は、日本語の教室以外でもコミュニケーション相手となるものが同じ日本語学習者であり、「ごめんね」のような短いものであれば、初級の初期の段階でも十分導入可能であると思われる。

日本語教育におけるコミュニケーション活動としてはロール・プレイを選んだ。ロール・プレイというタスクを選んだ理由は二つある。

同一人物が幾つものロールを果たしているのが現実の生

活であり、例えば教室で先生に向かっている時、学生としてのロールを、休み時間にクラスメートと談笑している時は同輩としてのロールを、店で買い物をしているとき、と言った具合である。つまり、実現的な生活の場面を教室の中でロール・プレイさせることができる。

第二の理由は、ロール・プレイの課題は日常的な課題であると言える。そのような問題解決を実生活に先立ってあるいはそれと平行して演じてみるのは学習者にとって意義があると同時に、まさにタスク中心の指導のもっとも得意とする活動タイプの一つであるといえる。更に教室からの成果を実現的な日常生活にも上手に体験できる。

課題（タスク）は実際の場面において実現しようとする具体的な目標をもっている。筆者の従来の研究からは次のような生活場面がある。

場面 1

あなたは学生時代の友達と本屋で待ち合わせるように約束しましたが、途中で、交通渋滞に巻き込まれて、結局あなたは25分ぐらい遅れました。

場面 2

あなたは先生の家を訪問すると約束しました。あなたは先生の家がよく分からなくて、ずいぶん探してしまいました。結局10分ぐらい遅れました。

場面 3

あなたはAさんにBさんの悪口を言ったところ、Aさんがその悪口をBさんに言ってしまいました。

場面 4

会議中、あなたの携帯電話が鳴りました。

場面 5

母親が出かけた後、母親が今から会う予定の人から「まだ来ていないが、もう家は出たか」という電話を受けた。

場面 6

スーパーで50歳ぐらいの女の人にぶつかってしまって、その人の荷物が床に散らばりました。

場面 7

電車の中で中年の男性の足を踏んでしまいました。

場面 8

あなたは先生から借りてきた本を壊してしまいました。

場面 9

お兄さんに借りた車を電柱にぶつけてしまいました。誰も怪我をしませんでしたが、車は破損してしまいました。

場面10

あなたは新しい友達Aさんに給料はいくらと聞きました。

場面11

Aさんはあなたに2万円を借りようとしました。しかし、あなたはちょうどお金を使う用があるため、貸すことができません。

場面12

あなたは友達のAさんと食べているとき、唾を飛ばしました。

場面13

あなたは取引先で行われる会議に行きましたが、大切な資料を忘れて、親しい同僚Aさんに届けてもらいました。

場面14

あなたはAさんとある熟語の意味について、言い争いをしましたが、辞書を調べたら、自分が間違っていたことが分かりました。

場面15

あなたはエレベータに乗ろうとしたところ、中から、ちょうど知らない人も降りてこようとしました。

場面16

Aさんにコンピューターのウィルス感染を修復してほしいと頼まれましたが、Aさんの所へ行ったら、自分もよく分からなくて、解決できませんでした。

どのような場面どのような相手どのような謝罪表現を用いるかという「場面の性格判断力」というスキルを指導者から学習者に理解させる必要がある。この時、インフォメーション・ギャップによる練習活動、例えばロール・プレイの時に相手は誰であるかが分からない、相手が先にインフォメーションを（自分は誰だ）与えてから謝罪表現を表現する練習が有効であると思われる。このように、現在、日本語学習において養成すべき能力としては、文法や語彙などの文法能力、いわゆる狭義の言語のほかに「いつ、誰に対して、どのように話すかという言語使用の適切さ」という伝達能力、いわゆるコミュニケーション能力を含めることが一般である。

6．おわりに

ことばを教えることは文化を教えることとよく言われる。ことばの使われ方は各文化によって異なる。母国語を学ぶ時、学習行動とともに自然に文化を学んでいくため問題は生じないが、外国語を学ぶには、学習者はすでに母国語の文化的価値、社会規範を持っているために社会言語学的な誤解が生じやすいので、外国語でコミュニケーションをする場合には、発音や語彙、文法などのいわゆる言語学的知識に加えて、その言語におけるものの考え方や相互作用のルールを知っていることが重要である。そうでないと、「ことば」を正しく使って発話しても思わぬ誤解や摩擦が生じることがある。社会言語学の視点から見ると、発話行為上の誤りは、発音・文法上のそれよりも重大な誤解を引き起こすと思われる。なぜなら、一般の人は、外国人が発音、文法上のミスを犯した場合、それは「学習言語をまだ良く知らない」と容認することができるが、発話行為上の誤りは、発音・文法上の誤りと異なり、表面にはっきりと誤りとして現れないため、ともすれば「この人は失礼だ」とか「この人は礼儀知らずだ」と、それを人格上の欠点とみなしがちであるからである。そのために、文化の違いによるコミュニケーションの失敗を避けるために、日本語の教師はマレーシア人に日本語ないし日本文化などを教える際に、表面的な言語表現のみを説明しても、不十分なのである。加えて、日本語教師は日・マ双方の社会・文化の背景とその違いを理解しておかなければならない。たとえば、本研究で示した様々な場面における発話行為に見出される相互作用のそれぞれの違い等といったものである。このような日・マ双方の社会・文化の背景とその違いを真に理解しておかないと、教える側も教えられる側も、日本語を十分理解したことにはならない。

本研究で得られた結果から、いくつかの点について日本語教育への提言として挙げることができる。日本語を教えることは、単に言葉や文型のみを教えれば良いわけではなく、それらの背景にある日本人のコミュニケーションスタイルや価値観などを自分のものと比較しながら学習していく必要がある。さらに、謝罪は単に言語表現だけではなく、コミュニケーションの技術・スキルの一つとして練習によって上手に身につけることができる。

こういった日本語の「謝罪」機能の特徴を正しく広げる現場はまさに、日本語教育現場であることはたびたび指摘してきたが、最後にそのことを再度強調しておきたい。

参考文献

B,Pizziconi. 2003 Re-examining politeness, face and the Japanese language. Journal of pragmatics 35 1471-1506

C,Goddard.1997 Cultural value and 'cultural scripts' of Malay (Bahasa Melayu). Journal of pragmatics 27 183-201

C,Goddard. 2001 Sabar, Ikhlas, setia- patient, sincere, loyal? Contrastive semantics of some 'virtues' in Malay and English. Journal of pragmatics 33 653-681

Kondo Fumiko 2003 "IIdeal Apologies" in Comparison with American "Ideal Apologies" -In Light of the Features of "Sunao" Observed in Psychotherapies 『現代社会学』

M. Suszczynska 1999 'Apologizing in English, Polish and Hungarian: Different language, different strategy' Journal of Pragmatics, Elseiver Science B.V, 31 1053-1065

Olhstain, Elite .1989 Apology across languages. In S. Blum-Kulka, J. Kasper, eds. Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies, 155-173

R.Ide 1998 'Sorry for your kindness: Japanese interactional ritual in public discourse' Journal of Pragmatics Elseiver Science B.V, 29 ,509-529

Trosborg, Anna. 1987 'Apology strategies in natives/non natives' Journal of Pragmatics Elseiver Science B.V. 11, 147-167

Wierzbicka, Anna. 1985 'Different cultures, different languages, different speech act' Journal of Pragmatics Elseiver Science B.V 9 ,145-178

Sugimoto, Naomi. 1995 'A Comparison of Conceptualizations of Apology in English and Japanese '『異文化コミュニケーション』第8号

堀江・インカピロム・プリヤー1993「謝罪の対照研究：日タイ対照研究」『日本語学』VOL.12明治書院、p22-28

熊取谷哲子1992「発話行為対照研究のための統合的アプローチ―日英語の「詫び」を例に―日本語教育79号、p.26-40

クモハマドナビル2004 社会言語学的観点からみた初級練習活動「2004年日本語教育実習報告書」九州大学大学院比較社会文化学府日本語教育講座発行 p49-57

――――2005「日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析（Part 1）～謝罪意識を焦点に～」平成17年度第16回社会言語学会発表論文集、p.12-15

――――2006「社会言語学的観点からみた日本語の練習活動～謝罪を例に～」JFKL 第三回日語教育発表会

――――2006「日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析（Part 2）～ポライトネス・ストラテジーを焦点に～」平成18年度第17回社会言語学会発表論文集、p.178-181

――――2006「日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析～謝罪ストラテジーを焦点に～」比較社会文化研究第19号 p53-61

――――2007「日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析～謝罪意識～」比較社会文化研究第21号、p13-19

石田恵里子・中道真木男1999「日本語教育における謝罪の扱い」『国文学―解釈と教材の研究』p118-124

伊藤恵美子.2002a.マレー語母語話者の語用論的能力と滞日期間の関係について：勧誘 に対する断り行為に見られる工学系ブミプトラのポライトネス.日本語教育115

近藤2002「日米比較「謝罪」考―謝罪のあり方とその照準」、『現代社会学3号』

松村瑞子1999『日本語会話におけるポライトネス～Brown&Levinson1987～の妥当性を中心に』言語科学第34号 p51-60

森山卓郎(1999)「お礼とお詫び―関係修復のシステムとして」『国文学―解釈と教材の研究』

中道真木男・土居真美1993「日本語教育における謝罪の扱い」『日本語学』VOL.12明治書院 p66-74

縫部良徳　1994『日本語授業学』入門～組み立て方、進め方、分析と診断～歴々社
柴田庄一・山口和代　2002「日本語習得における人間関係の認知と文化的要因に関する考察」『言語文化論集』p141-158
1981　『にほんごこんにちは』マレーシアの教育省
筑紫啓子　1993「日本語の陳謝表現に関する実証的研究」『日本語教育論文集』福岡 YWCA、p.73-91

A Contrastive Analysis of Japanese and Malaysian Apology As A Proposal for Japanese Language Education in Malaysia

Ku Mohd Nabil

This paper aim at providing useful information for Japanese language educators and to the Japanese language students, especially in the education of Malaysian students learning Japanese language.

In Malaysia, methods of how to apologize are emphasize in the education of Japanese language. These methods are essential for making a smoother communication.

Furthermore, among many other methods suggested, role-play was the one which considered to be the most method which can be a main potential teaching method in the future of Japanese language education.